

御布施七貫文送り給ひ畢んぬ。囑累品の御心は、仏虚空に立ち給ひて、四百万億那由他の世界にむさしののすすきのごとく、富士山の木のごとく、ぞくぞくとひざをつめよせて頭を地につけ、身をまげ掌をあはせ、あせを流し、つゆしげくおはせし上行菩薩等・文殊等・大梵天王・帝釈・日月・四天王・竜王・十羅刹女等に、法華経をゆづらんがために、三度まで頂をなでさせ給ふ。譬へば悲母の一子が頂のかみをなづるがごとし。爾の時に上行乃至日月等 忝き仰せを蒙りて、法華経を末代に弘通せんとちかひ給ひしなり。

薬王品と申すは、昔喜見菩薩と申せし菩薩、日月浄明德仏に法華経を習はせ給ひて、其の師の恩と申し、法華経のたうとさと申し、かんにたへかねて万の重宝を尽くさせ給ひしかども、なを心ゆかずして身に油をぬりて千二百歳の間、当時の油にとうしみを入れてたくがごとく身をたいて仏を供養し、後に七万二千歳が間ひちをともしびとしてたきつくし、法華経を御供養候き。されば今法華経を後五百歳的女人供養せば、其の功德を一分ものこさずゆづるべし。譬へば長者の一子に一切の財宝をゆづるがごとし。妙音品と申すは、東方の浄華宿王智仏の国に妙音菩薩と申せし菩薩あり。昔の雲雷音王仏の御代に妙莊嚴王の後、浄徳夫人なり。昔法華経を供養して今妙音菩薩となれり。釈迦如来の娑婆世界にして法華経を説き給ふにまいりて約束申して、末代的女人の法華経を持ち給ふをまもるべしと云云。観音品と申すは、又普門品と名づく。始めは観世音菩薩を持ち奉る人の功德を説きて候。此を観音品と名づく。後には観音の持ち給へる法華経を持つ人の功德をとけり。此を普門品と名づく。

陀羅尼品と申すは、二聖・二天・十羅刹女の法華経の行者を守護すべき様を説けり。二聖と申すは薬王と勇施となり。二天と申すは毘沙門と持国天となり。十羅刹女と申すは十人の大鬼神女、四天下の一切の鬼神の母なり。又十羅刹女の母あり、鬼子母神是なり。鬼のならひとして人を食す。人に三十六物あり。所謂糞と尿と唾と肉と血と皮と骨と五臓と六腑と髪と毛と氣と命等なり。而るに下品の鬼神は糞等を食し、中品の鬼神は骨等を食す。上品の鬼神は精気を食す。此の十羅刹女は上品の鬼神として精気を食す。疫病の大鬼神なり。鬼神に二あり。一には善鬼、二には悪鬼なり。善鬼は法華経の怨を食す。悪鬼は法華経の行者を食す。今日本国の去年今年の大疫病は何とか心うべき。此を答ふべき様は一には善鬼なり。梵王・帝釈・日月・四天の許されありて法華経

の怨を食す。二には悪鬼が第六天の魔王のすゝめによりて法華經を修行する人を食す。善鬼が法華經の怨を食らふことは、官兵の朝敵を罰するがごとし。悪鬼が法華經の行者を食らふは、強盜夜討等が官兵を殺すがごとし。例せば日本国に仏法の渡りてありし時、
仏法の敵たりし物部大連・守屋等も疫病をやみき。蘇我宿弥・馬子等もやみき。欽明・敏達・用明の三代の国王は心には仏法・釈迦如来を信じまいらせ給ひてありしかども、外には国の礼にまかせて天照太神・熊野山等を仰ぎまいらせさせ給ひしかども、仏と法との信はうすく、神の信はあつかりしかば、強きにひかれて三代の国王疫病瘡癩にして崩御ならせ給ひき。此をもて上の二鬼をも今の代の世間の人々の疫病をも、日蓮が方のやみしぬをも心うべし。されば身をすてゝ信ぜん人々はやまぬへんもあるべし。又やむともたすかるへんもあるべし。又大悪鬼に値ひなば命を奪はるゝ人もあるべし。例せば畠山重忠は日本第一の大力の大將なりしかども、多勢には終にほろびぬ。又日本国の一切の真言師の悪霊となれると、並びに禅宗・念佛者等が日蓮をあだまんがために国中に入り乱れたり。又梵釈・日月・十羅刹の眷属日本国に乱入せり。両方互ひに責めとらんとはげむなり。而るに十羅刹女は総じて法華經の行者を守護すべしと誓はせ給ひて候へば、一切の法華經を持つ人々をば守護せさせ給ふらんと思ひ候に、法華經を持つ人々も或は大日經はまされりなど申して、真言師が法華經を讀誦し候はかへりてそしるにて候なり。又余の宗々も此を以て押し計るべし。又法華經をば經のごとく持つ人々も、法華經の行者を或は貪瞋癡により、或は世間の事により、或はしなじなのふるまひによつて憎む人あり。此は法華經を信ずれども信ずる功德なし。かへりて罰をかほるなり。例せば父母などには謀反等より外は、子息等の身として此に背けば不孝なり。父が我がいとをしきめをとり、母が我がいとをしきをとこを奪ふとも、子の身として一分も違はば、現世には天に捨てられ、後生には必ず阿鼻地獄に墮つる業なり。何に況んや父母にまされる賢王に背かんをや。何に況んや父母・国王に百千万億倍まされる世間の師をや。何に況んや出世間の師をや。何に況んや法華經の御師をや。黄河は千年に一度すむといへり。聖人は千年に一度出づるなり。仏は無量劫に一度出世し給ふ。彼には値ふといへども法華經には値ひがたし。設ひ法華經に値ひ奉るとも、末代の凡夫法華經の行者には値ひがたし。何ぞなれば末代の法華經の行者は、法華經を説かざる華嚴・阿含・方等・般若・大日經等の千二百余尊よりも、末代に法華經を説く行者は勝れて候なるを、妙楽大師釈して云く「供養すること有らん者は福十号に過ぎ、若し悩乱する者は頭七分に破れん」云云。今日本国の者去年今年の疫病と、去ぬる正嘉の疫病とは人王始まりて九十余代に並びなき疫病なり。聖人の国にあるをあだむゆへと見えたり。師子を吼ゆ

る犬は腸^{はらわた}切れ、日月をのむ修羅^{しゅら}は頭の破れ候なるはこれなり。日本国の一切衆生すでに三分が二はやみぬ。又半分は死しぬ。今一分は身はやまざれども心はやみぬ。又頭も顛^{けん}にも冥^{みょう}にも破ぬらん。罰に四あり。総罰・別罰・冥罰・顛罰なり。聖人をあだめば総罰一国にわたる。又四天下、又六欲・四禪にわたる。賢人をあだめば但敵人等なり。今日本国の疫病は総罰なり。定んで聖人の国にあるをあだむか。山は玉をいだけば草木^くかれず。国に聖人あれば其の国やぶれず。山の草木^くのかれぬは玉のある故とも愚者はしらず。国のやぶるゝは聖人をあだむ故とも愚人は弁^{わきま}へざるか。

設^たひ日月の光ありとも、盲目^{めし}のために用ゆる事なし。設^たひ声ありとも、耳しひのためになにの用かあるべき。日本国の一切衆生は盲目^{めし}と耳しひのごとし。此の一切の眼と耳とをくじりて、一切の眼をあけ、一切の耳に物をきかせんは、いか程の功德かあるべき。誰の人か此の功德をば計るべき。設^たひ父母子をうみて眼・耳ありとも、物を教ふる師なくば畜生の眼・耳にてこそあらましか。日本の一切衆生は十方の中には西方の一方、一切の仏の中には阿弥陀仏、一切の行の中には阿弥陀^{みだ}の名号^{みょうごう}、此の三を本として余行をば兼たる人もあり、一向なる人もありしに、某^{それがし}去ぬる建長五年より今に至るまで二十余年の間、遠くは一代聖教の勝劣・先後・浅深を立て、近くは弥陀念仏と法華経の題目との高下を立て申す程に、上一人より下万民に至るまで此の事を用ひず。或は師々に問ひ、或は主々に訴へ、或は傍輩^{ほうばい}にかたり、或は我が身の妻子眷属に申すほどに、国々・郡々・郷々・村々・寺々・社々に沙汰^{さた}ある程に、人ごとに日蓮が名を知り、法華経を念仏に對して念仏のいみじき様、法華経^{かな}叶ひがたき事、諸人のいみじき様、日蓮^悪わるき様を申す程に、上もあだみ、下も悪^{にく}む。日本一同に法華経と行者との大怨敵となりぬ。かう申せば日本国の人々並びに日蓮が方の中にも物におぼえぬ者は、人に信ぜられんとあらぬ事を云ふと思へり。此は仏法の道理を信じたる男女に知らせん^料れうに申す。各々の心にまかせ給ふべし。

妙莊嚴王品と申すは、殊^{こと}に女人の御ために用ふる事なり。妻が夫をすゝめたる品なり。末代に及びても、女房の男をすゝめんは、名こそかわりたりとも功德は但淨徳夫人のごとし。いはうや此は女房も男も共に御信用あり、鳥の二つの羽そなはり、車の二つの輪^わかゝれり。何事が成ぜざるべき。天あり地あり、日あり月あり、日てり雨ふる、功德の草木花さき菓なるべし。次に勸発品と申すは、釈迦仏の御弟子の中に僧はあまたありしかども、迦葉^{かしょう}・阿難^{あなん}左右におはしき。王の左右の臣の如し、此は小乗経の仏なり。又普賢^{ふげん}・文殊と申すは一切の菩薩多しといへども、教主釈尊の左右の臣なり。而るに一代超過の法華経八箇年が間、十方の諸仏菩薩等、大地微塵よりも多く集まり候ひしに、左右の

臣たる普賢菩薩のおはせざりしは不思議なりし事なり。而れども妙莊嚴王品をとかれて
さておはりぬべかりしに、東方宝威徳淨王仏の国より万億の伎樂を奏し、無数の八部
衆を引率して、おくれればせして参らせ給ひしかば、仏の御きそくやあしからんずらんと
思ひし故にや、色かへて末代に法華經の行者を守護すべきやうをねんごろに申し上られ
しかば、仏も法華經を閻浮に流布せんこと、ことにねんごろなるべきと申すにやめでさ
せ給ひけん。返りて上の上位よりも、ことにねんごろに仏ほめさせ給へり。

かゝる法華經を末代の女人、二十八品を品々ごとに供養せばやとおぼしめす、但事には
はあらず。宝塔品の御時は多宝如来・釈迦如来・十方の諸仏・一切の菩薩あつまらせ給
ひぬ。此の宝塔品はいづれのところにか只今ましますらんとかんがへ候へば、日女御前
の御胸の間、八葉の心蓮華の内におはしますと日蓮は見まいらせて候。例せば蓮のみに
蓮華の有るがごとく、後の御腹に太子を懐妊せるがごとし。十善を持てる人、太子と生
まれんとして後の御腹にましますれば諸天此を守護す。故に太子をば天子と号す。法華經
二十八品の文字、六万九千三百八十四字、一々の文字は字ごとに太子のごとし。字ごと
に仏の御種子なり。闇の中に影あり、人此をみず。虚空に鳥の飛跡あり、人此をみず。
大海に魚の道あり、人これをみず。月の中に四天下の人物一もかけず、人此をみず。而
りといへども天眼は此をみる。日女御前の御身の内心に宝塔品まします。凡夫は見ずと
いへども、釈迦・多宝・十方の諸仏は御らんあり。日蓮又此をすいす。あらたうとしたう
とし。

周の文王は老いたる者をやしなひていくさに勝ち、其の末三十七代八百年の間、
すゑすゑには、ひが事ありしかども、根本の功によりてさかへさせ給ふ。阿闍世王は大
悪人たりしかども、父びんばさら王の仏を数年やしなひまいらせし故に、九十年の間位
を持ち給ひき。当世も又かくの如く、法華經の御かたきに成りて候代なれば、須臾も持
つべしとはみえねども、故権大夫殿・武蔵前司入道殿の御まつりごといみじくて暫
く安穩なるか。其れも始終は法華經の敵と成りなば叶ふまじきにや。此の人々の御僻案
には、念仏者等は法華經にちいんなり、日蓮は念仏の敵なり、我等は何れをも信じたり
と云云。日蓮つめて云く、代に大禍なくば古にすぎたる疫病・飢饉・大兵乱はいかに。召
も決せずして法華經の行者を二度まで大科に行ひしはいかに、不便不便。而るに女人の
御身として法華經の御命をつがせ給ふは、釈迦・多宝・十方の諸仏の御父母の御命をつ
がせ給ふなり。此の功德をもてる人一閻浮提の内にあるべしや。恐々謹言。

六月廿五日

日蓮花押

日女御前